

# ハイチデーはじめて物語 2019年前期児童会

①



今から35年ほど前、シスター須藤が初等科生全員にハイチについてお話をしてくださいました。

「ハイチの方々は、とても大変な生活を送っているのですよ。ハイチでは、結核という、日本ではとっくに治る病気で国民の多くが亡くなっています。私が医者としてハイチに行ったのは、少しでもハイチの方々を救いたかったからです。」

「私たちも、ハイチの方々のために何かお役に立てることはないかな。」

②



シスターのお話を聞いて、子ども達は一人ひとり、日本から何ができるか、一生懸命考えました。

各クラスで話し合ったり、代表委員会でも相談したりしました。

「あっそうだ！お昼ご飯を抜きにして、ハイチの貧しい方々のために募金するのはどう？」

みんなは、おなかをすかせているハイチの子ども達のつらさを同じように感じたいと思ったのですが、お弁当抜きにするのは、午後からの授業に集中できない心配があるのでは？という先生からのアドバイスがあつて、おにぎり弁当にして、おかず代を募金することになりました。

③



いよいよ初めてのハイチデーの日がやってきました。1年生から6年生まで、みんなわくわくしています。

「どれくらいお金が集まるのかな？」

「どうやって使われるのかな？」

募金を集める時には、みんな、ハイチの子ども達の役に立ちますように、と心から願っていました。

④



第1回目のハイチデーから35年ほどが経ちました。今でもおにぎり弁当の伝統が続いています。食べたつもり、買ったつものつものつもの貯金と、おかずを我慢したお金が募金されています。

⑤



今では、ハイチデーのお金は、ハイチだけでなくケニア、フィリピン、ハイチ、インドネシア、ウガンダ、コンゴに送られています。



先日、コンゴの聖心からハイチデー募金のお礼状が届きました。コンゴでは、貧しくて朝ご飯を食べられずに登校してくる子どもたちがたくさんいるそうです。おなかですいたまま、毎朝2キロメートルから7キロメートルくらい。つまり学校から渋谷駅よりもっともっと遠くから、おなかぺこぺこのままで学校に通ってくる子どもたちのために、おかゆの給食を作る材料費として使われています。

今年度初めてのハイチデーは、7月1日です。ハイチデーを始めた当時の先輩方の思いを引き継いで、私たちも心を込めて募金しましょう。